冬号
第324号

# 一粒の麦

社会福祉法人エデンの園
2022年 1 月22日

ひとつぶのむぎ

**聖書のことば**

一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。
しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。（聖書　ヨハネの福音書12章24節）

# ～　時代の変化に願うこと　～

総務　マネージャー　櫻　木　　香

謹んで、新年のご挨拶を申し上げます。
新型コロナウイルス感染者が日本国内で初めて確認されてから２年が経ちました。
流行は繰り返され、新しい変異株の脅威など、この先もまだまだ苦悩は続きそうです。
一方、この２年間で、感染防止対策の制度や社会保障の充実、医療体制の強化など、この状況に適応するために多くの進歩がありました。
その時代の状況に応じて社会や経済を維持していこうと知恵や技術を磨く人類の適応力は、凄いものだなと感じたものです。
時代の変化を感じたのは、新型コロナだけではありません。
エデンの園では、昨年2021年に２名の利用者の看取りました。
これまで、入院先や他法人の施設へ移られてから亡くなられるケースはありましたが、エデンの園で最期を迎える利用者の人生に関わることは、初めての経験でした。
利用者の皆さんが、エデンの園でどんな経験を積み、これからどのような人生を歩んでいくのかという将来像が見えることは、私たちにとってとても大事なことです。
そのために、多様化する障がい特性に応じた個別支援の提供や、機能回復のためのリハビリテーションの推進など、専門技術を用いて利用者と関わっていくことは、とても大きな役割となりますが、エデンの園の場合は、それに加えて「キリストの愛の精神」によって、内面的な大切なものを育んでいく使命があります。
しかし、愛の精神は、目に見えない概念ですから、私たちの働きの成果物として評価する事は、とても難しい問題で、永遠のテーマでもあります。
法人理念の第一となっている「キリストの愛の精神による利用者支援を行います」に示されている「キリストの愛の精神」とは、「隣人愛」のことです。
この隣人愛については、聖書の中で、イエス様の知恵を試そうとした律法の専門家が「私の隣人は誰ですか？」という質問に対して、イエス様がたとえ話をされる場面があります。

“（要約）ある人が旅の途中、追いはぎに合い、服を取られ、半殺しにされて、道端に放置されました。そこに３人の人が通りかかりました。1人目は、祭司で、神様に仕える仕事をしている人でした。彼は、その被害者を見ましたが、避けて行ってしまいました。２人目は、とても信仰熱心な人でしたが、この人も避けて行ってしまいました。そして３番目に通りがかった人は、軽蔑し差別されている人でしたが、この人だけが、その被害者を助け、介抱してあげました。さて、この３人の中で、誰がこの被害者の隣人になったでしょうか。”
（聖書の本文では、前後の文脈がとても大事なので、是非、聖書を手に取って読んでいただけると幸いです。参照：ルカによる福音書22章25節～37節）

このたとえ話から、イエス様は、差別と偏見や形式的で愛が伴わっていない「正しさ」を強く指摘しました。
そして、心から心配し見返りを求めずに寄り添う親切な愛によって裏付けられる具体的な行動こそ「真実の隣人愛」として教えようとされました。
私たちの法人理念の全ては、ここに詰まっているのです。
ここ数年で、法人内の事業規模拡大に伴い、50数名程だった職員数が現在は120名程にまで増えました。
また、国からは、高齢者や障がい者の雇用促進が義務化され、昨今の働き方改革制度に関わる職員処遇の方針転換など、働き方が変わり、個別性が強調されるようになりました。
働く職員が多様化している状況ですが、これも利用者にとっては重要な生活環境の一つだと感じています。
ですから、まずは私たち職員同士が、隣人愛の実践として、多様性を受け入れ、そして弱く小さな声に耳を傾けられるようになりたいと願わされます。
そして、一人一人の利用者と関わっていく中で、目には見えない心の中にある温かい物を届けて、いつか実を結ぶことに対する信頼を持つことができるのではないかと思います。